

おぐらおが

(題字は初代学長 山田守英氏)

第 79 号

平成 6 年 3 月 25 日

編集 旭川医科大学
 厚生補導委員会
 発行 旭川医科大学教務部学生課



(写真撮影 施設課 長谷川 裕)

第16期生を送るにあたって……学 長… 2	クリスマスコンサート……………11
はじまり……………久保 良彦… 3	平成 5 年度 1 年のあゆみ……………12
旭川医科大学第16回卒業生名簿…………… 4	新歓合宿のお知らせ……………14
卒業にあたって……………豊嶋 恵理… 4	20才以上の学生の国民年金への加入について…14
旭川での 6 年間……………横浜 史郎… 5	平成 6 年度前期分授業料免除及び延納・分納について ……14
卒業にあたって……………竹内 理恵… 5	平成 6 年度日本育英会奨学生の募集について…15
大学に赴任したころに読んだ本…久津見晴彦… 6	学生教育研究災害傷害保険の加入について…15
退官にあたって……………並木 正義… 7	Some Developments in English Studying in Asahikawa Medical College ……Simon N. Bayley…15
学生二千態……………原田 一典… 8	学生団体の設立・継続届について……………16
日常性からの脱皮……………坂本 尚志… 9	教官の異動……………16
講師に昇任して……………野中 聡…10	課外活動報告……………16
講師に昇任して……………箭原 修…10	窓 外……………橋爪 裕子…16
講師に昇任して……………秋葉 純…11	
スキー教室……………11	



第16期生を送るにあたって

学長 清水 哲也

皆さん、学士学位記取得おめでとう。

一般教育から始まって、基礎医学、そして臨床医学教育に至る、他学部に比して2年間も長い学生生活を終えられて、今、学位記を手にした皆さん、そしてやさしい慈愛に満ちた眼差しで見守ってこられたご父兄の皆様のお気持ちに思いを馳せるにつけ、私自身も萬感の想い胸に迫るものがあります。

この想いはまさに、教育に当られた全教官に共通した感慨でもあります。

ところで、「卒業式」という言葉は、どちらかと申しますと事の終わりという「ひびき」がありますが、卒業式に当たる Commencement という英語は、「開始」つまり「こと」の始まりを意味しております。

このことは、大変、大きな意義をもっております。

それは医師ほど「生涯」にわたる学習が強く求められている職業は他にないからです。

医療は、その対象が、ただちに人命にかかわることであるだけに当然といえば当然でありましょう。

人生とは生涯「重荷」を背負って歩くが如しという先人の言葉がありますが、「生涯学習」の精神を喪失した医師は病める人達やその家族からの信頼を一瞬にして失うことになります。

これから、皆さんの多くは臨床の第一線にあって、日常の診療に携わることになるでありましょうが、「医の心」といわれる「医療の原点」を片時も忘れてはなりません。

「医の原点」とは、人の「いたみ」をわが「いたみ」ととらえることであります。

病に苦しむ人達の、そのすべての「なやみ」を医師の豊かな感性と暖かい手の「ぬくもり」で、病める人達の「こころ」と「からだ」をしっかりと受けとめることであります。

個々の症状や疾患に目を奪われて仕舞う、診療技術中心の浅薄な職業人ではなく、病気にさいなまれている患者さんの全体像を「そこはかかない」思いで、やさしく包みこんであげることの出来る医師になってほしいのです。

「医療」はまさに「包括医療」という言葉によって表現されるように、ただ単に診療し、直後リハビリ

テーションを行うといったコンセプトから、予防医学、社会的リハビリテーションまでも含めた概念、つまり保健、医療、福祉までもを総合的にその視程の中にとらえる考え方が強く求められております。

したがって、新しい時代に対応するためには、看護要員などのコメディカルスタッフはもとより、包括医療にたずさわる全ての構成員から全幅の信頼が寄せられるチームリーダーの資質もまた強く求められるのです。

釈迦は、人生とは4つの苦しみを伴う旅路であると説いております。それは生きる苦しみ、老いる苦しみ、病む苦しみ、そして死ぬ苦しみだと申しております。

その苦しみの旅路の全てに正面からアプローチするのが医師であるといえましょう。

ただ単に病院の中だけで、手術をしたり、処方をするといった従来型の医療から、老人保健施設、老人訪問看護ステーション、在宅介護支援センターに至るすべての施設の機能にかかわりをもってきます。

これに対処するためには、激変する社会事象に対して、常に鋭い洞察力が要求されます。

今、わが国は出生率の激減と世界一の長寿社会化という二つの人口動態によって、超高齢化社会へ、人類文明史上、まさに類例のないスピードで突入しつつあります。フランスが115年、スウェーデンが85年を要した推移を、わが国は、わずか25年で迎えるようとしているのです。31年後の2025年には国民の4人に1人が65歳以上の高齢人口で占められようとしており、したがって患者の2人に1人は65歳以上という事態が予測され、現在、80万人に達している寝たきり老人の数も、2025年には約3倍の230万人に達するであろうと推定されております。

かかる社会事象の「激変」動向に対して医療人として即応可能な capability を是非とも身につけて下さい。

病める人、老いた人達に対処する、ゆるぎない基本概念は、心身相関の観点に立脚したそこはかかない「思いやり」、「慈しみのこころ」であることを再度、強調して、皆さんへの「はなむけ」の言葉といたします。



はじまり

第6学年担当 久保良彦

旭川医科大学第16期卒業生のみなさん、学士学位記取得おめでとう。どんな巡り合わせか、あなたがたの担当教官となりましたが、この2年間縁な対話の機会も作らず、世のだめ親のようにただ勉強しろ、欠席するなどと言った程度で終ってしまいました。あなたがたには何とも気の毒な始末ですが、これも世にいわれる一期一会、お互い本学でえた貴重な縁を大切にしたいものと希っております。兎も角、全員揃っての卒業は嬉しく、心からお祝い申し上げます。

卒業ということで6年間あるいはそれ以上の本学学生生活を振り返り、どのような感慨を懐いておられるのでしょうか。後を振り返り向くより、むしろ目前の国試を想って胸を塞らせ、あるいはその先の医師として臨床に直接触れるこれからの毎日や自由な研究生活に思いを馳せ、期待に心を踊らせておられるのではないかと思います。

卒業というわたくしには小学唱歌「抑げば尊し」のメロディが浮び、女生徒が鼻水をすすり、肩を抱き合う田舎の尋常高等小学校の卒業式の情景が思い出されます。このメロディは陰気で寒々としたスコットランドで育まれたとされておりますが、第2次大戦の開戦を前にした暗く貧しい日本で、住む人々の感情にいかにもびったりしていたように思い返されます。学校という特別に保護された施設から出され、何かわからない恐ろしい世間に取り込まれる、その未知への恐れ、あるいは悲愴感といったものが子供心を強くゆさぶったのでしょうか。いずれにしても過去に引かされる方がより強く、力を溜めて未来に向って勇躍するというような雰囲気ではなかったことは確かです。

その当時から5～60年が過ぎた現在、すでてがすっかり様変わりしてしまいました。何よりも経済的な豊かさが往時と比べようがない程で、すべてがこれに盡きるように思えます。もはやスコットランド民謡のメロディはそぐわず、卒業は「おわり」ではなく「はじまり」であるというほんものの雰囲気が味わえる世の中になったといえます。

この豊かな経済力を基盤に、医療も38年前わたくしの卒業時には考えも及ばない、ぜいたくと思えるレベルにまで引き上げられました。ほとんど津々浦々まで行きわたっている高価な診断機器を駆使した患者データは、とめどもなく詳細となり、治療する側に溢れんばかりの情報をもたらしております。薬剤をはじめ治療手段・技術の開発も盛んで、治療に当ってより多くの選択肢が提供されるようになりました。

もちろん、このようにスピード豊かな医療の展開は周辺科学の急速な進歩に負っていることはいうまでもありませんが、これとてもわが国の経済的発展を抜いては考えられないことです。

ところでこの医療の充実・高度化が患者にもたらす恩恵の計り知れないことはいうまでもありません。しかし、これを単純に喜んでばかりはいられません。それは当然医師の他、医療専門職—コメディカルスタッフの大巾な増員を不可欠といたしますし、患者とのより一層入念なコミュニケーションを計らねばなりません。端的にいえばますます時間・暇と費用のかさむ医療になることを意味しております。それに対してどこまで、いつまでわが国の経済事情が裏付けできるのでありましようか、むしろ気懸りになります。

身近な問題でもたとえば、余りに詳細な術前情報が時に適応の決定を迷わせることになるという例がみられるように、あり余る情報に対する適確な処理能力がますます求められるようになってゆくと考えられます。また、臓器・組織の機能保存あるいは維持システムが発達し、かつての難手術がどんどん容易におこなえるようになってきておりますが、それだけにより確実な手術の実施あるいは結果が求められることなど、医療の質が強く問われる時代になってきていることを切実に感じます。長年米国でおこなわれてきておりますクリニカルインディセーターによる医療の質の保証、あるいは改善という一種の品質管理システムが形を変え、自然発生的に入ってきたつあるのかも知れません。

みなさんのこれからは、出席をチェックされ、試験を受けながら順次学年が進行して卒業に至ったこれまでの学生生活と全く異質のものであります。

何よりも「はじまり」はありますが「おわり」がありません。学生ではなくプロフェッショナルであります。

研修期間を除き、明確な指導者あるいは評価を下してくれる者はありません。強いて挙げれば、先輩・同僚・後輩・患者あるいは社会など、あなたがたの周りの人々すべてが指導者であり、判定者であるといえます。とりわけ患者は最大の師ということになります。

いま、みなさんは横一線に揃って、果しなく遠い道を歩むスタートラインにつきました。いよいよ出発です。健康第一に旭医出身の誇りをもって、研鑽を積み、それぞれの領域で活躍されるよう心から祈念いたします。(外科学第一講座 教授)

旭川医科大学第16回卒業生名簿

希理 豊紀 司建夫 紀子 子圭 宏創 太子 義郎 宏二 弘郎 子徳
 幸恵 美泰 教友 夏元 巖 健順 和竜 幹康 吏浩 三
 田嶋 島山 岡屋 原川 部場 原良 田上 上川 園田 田中 浜田 本
 富豊 中 中長 萩長 長谷 野 日福 増三 三本 森安 山山 横吉 吉
 以上 119名

子介 行行 子之享 圭子 司子 子拓 聡子 一涉 穂二 昭恵 博之 之
 祐恵 伸隆 香和 華健 節文 文進 美浩 知理 吉義 浩
 川沢 森山 崎島 岡村 村山 刈木 保原 木藤 木水 木橋 内山 村川
 小小 尾片 川川 貴喜 木桐 草黒 小榊 佐佐 澤清 鈴高 竹竹 田敦

枝み 稔啓 香正 守恵 巳浩 央明 利洋 子健 之徹 誠雄 朗博 生作
 玲ま ゆ 優和 久知 利未 正和 和朋 弘 守貴 文昌 健
 野 田本 浦上 川 田内 田達 部上 井村 坂江 見本 浅羽 田本
 細堀 本松 三村 森森 八ツ 山吉 安阿 池石 市井 入宇 榎大 大岡 岡

美文 寛代 幹純 幸貴 之子 巳子 郎夏 弘美 博健 一介 美文 美一
 恵寛 雅 眞芳 裕秀 由紀 希智 千靖 正康 耕恵 里敏 和洋
 藤藤 行杉 原田 中邊 部 川山 井尾 野多 柳上 本本 境川 田見
 佐佐 執高 高竹 田田 種辻 恒友 鳥中 中長 二野 橋旗 濱早 平深

子哲 顕史 修健 彦巧 敦彦 之公 登裕 織研 子子 矢幸 人子 洋司
 直 義浩 道充 雅孝 昭 恵香 陽恵 亜秀 勝裕 哲
 木元 田部 田根 柳田 田幡 木山 子口 地地 川谷 野西 田藤 上
 青秋 熱阿 上曾 大大 岡岡 小柏 片金 川川 菊菊 清熊 河小 竹齋 坂

卒業にあたって

第16期卒業生 豊嶋 恵理



初めて真っ白な旭川空港に降り立ってから、早6年がたちました。18年東京で暮らしていた高校生が、突然旭川を目指すに至った経緯は他愛のないもので、

卒業に辿りつくことができたのも諸方面の温かい御声援のお陰です。また、当大学の卒業生になれたことを幸運に感じています。

長い学生生活の間には、講義と実習、クラブ活動やレクリエーションなど、様々な出来事がありました。文字通り転機となったのは、5年の冬から1年間の臨床実習でした。まず第一に患者さんとの新鮮な毎日の出会いがありました。泣きじゃくる男の子を必死にあやしたり、外来で涙する女性を前に途方に暮れた一方、励ましのお便りをいただいて元気を取り戻したものです。第二に相手をして下さった先生方の姿が思い出されます。お忙しい中、労を惜しまず指導して頂きました。特に聴診時の態度を注意された際聞いたお話に感銘を受けました。そして第三に、何よりも仲間に恵まれ、わがままな私も何

とか実習を終えることができたことは、グループの方がいたからだと思っています。実習に真剣に取り組み、症例検討は勿論のこと、外来での空き時間をチーム医療について激論を交わし、カンファレンスルームで部活のあり方について討論したり、打ち上げで進路や将来のこと、教育と医療への批判、時には恋愛問題について語り合い、その都度7人に出会えたことを感謝しました。まるで青春映画のような毎日を送っていたわけです。実習中の祝日を利用して、5時集合で緑岳の紅葉を見に行ったことは、忘れられません。グループ以外の方も含め、今後はそれぞれの方向に進みますが、共有していた時間をまた一緒に思い出せることを願っています。

自分が幸運であったと感じることが、もうひとつあります。私は機会を与えられて基礎医学講座にもお世話になりました。臨床に進む可能性の高い学生に対して非常に親切に教えて下さり、研究へ目を向ける好機を与えて頂いた両病理学講座の先生方に、この場を借りて御礼申し上げます。本当にありがとうございました。

最後になりましたが、係って下さったすべての方に、感謝を。

旭川での6年間

第16期卒業生 横浜 吏郎



6年間の大学生活を振り返ってみて、十分満足できる結果を残せたものが何かあったであろうか。考えても何も思い浮かんできません。

授業態度は学年が上になるにつれてどんどん悪化していきました。座る場所もどんどん教室の後上方へと移動していき、4年生からは後ろの出入口から2番目の席が私の定位置となりました。(いつも置いてあったスポーツ新聞は私のものです)

部活も自分では結構練習したつもりでしたが、その割には自分の目標とするレベルにはなかなか到達できませんでした。後輩達には、「練習しろ、練習しろ」と怒ってばかりの、さぞかしうるさい奴だったことでしょう。

友人や部活の仲間達との人間関係でも色々なことがありました。楽しかった思い出もたくさんありますが、つらかった思い出もやっぱりあります。

何事か一緒に懸命打ちこむこともありましたが、その10倍くらいの時間はだらだらと無為に過ごしてしまった気がします。

しかし、私はこんな6年間についてそれ程後悔してはいません。親元を離れての旭川での生活は、それまでの変化の乏しい日々と比べると、(少し大げさですが)ドラマチックなものでした。楽しかったことも、辛かったことも、そしてとるに足らないようなことでさえも、少しずつ私の中に経験値として貯えられてきたように思います。社会の中における自分のポジションやマナーといったものが、この頃やっとわかりかけてきたようです。ただ、物事を多面的にみる力がつける為、もっと様々なことに挑戦しておくべきだった。今振り返って思えばこのことが大学生活における、一番の反省点であり、これからの私の人生における課題でもあります。

我々6年生はいよいよ医師として研究者として社会に巣立っていくわけですが、これからも様々な困難が待ち構えていることと思います。しかし私は、それらを乗り越えていくうえで今まで少しずつ貯えてきた経験がきっと役に立つと信じています。皆で支えあってきつい階段を一步一步のぼりつめていきましょう。

最後になりましたが、私を長い間バックアップしてくれた家族の者達、先生方、友人達、先輩後輩達、職員の方々に本当に感謝したいと思います。そしてこれからもどうかよろしく願います。

卒業にあたって

第16期卒業生 竹内 理恵



入試のために旭川に初めて来た日、大学の周辺を少し歩いてみたのですが、その時どういっわけか、いきなり道に迷ってしまったという思い出があります。

雪の多い年だったらしく、道の両側に雪の壁がそびえ立っていて、「このまま帰れなくなるかもしれない。」と、本気で不安に思ったのが、まるで昨日の事のように思えます。

あれから、今日でちょうど6年になりますが、大学の周りも随分変わっており、時間の流れを感じさせられます。そこで、今改めて振り返ってみると、残念なことに私には、大学生活でこんなことをやりました、と胸を張ってここに書けるような事は特に無いような気がします。そうはいっても、毎日無我夢中で過ごしてきたなかで、色々な友人や先輩、後輩と出会ったり、一人暮らしをして苦労してみたり、皆であちこちへ行ったりと、小さなことながら、たくさんの経験をする事ができました。6年間、派

手な出来事はなかったけれど、こんな毎日の積み重ねが、私にとって大切な財産になっているのだと、(月並みだけれど)思っています。

又、私は4年生からブラスアンサンブル部に所属していたのですが、そこでも貴重な体験をすることができました。何か一つの曲を演じるときに、みんなが何気なく音を合わせているうちに、自然に合奏になってゆく、ということが、特に大きな感動で、私の大好きな瞬間でした。部活動以外の場でも、たくさんの仲間と一緒に何かをやる、という機会が多くありました。皆で一つの事をやりとげた時の満足感は何れようもなく、又、自分がその中に参加できたということが大変うれしく思います。

入学当時はダンボール箱5つ分の荷物でやって来たのが、今ではその何倍もの量になっています。しかし、私の本当の「財産」は、それよりもずっと多く、豊かなものになったと信じています。

6年間、色々な事があり、悲しい別れもありました。でも、今振り返ってみると、こんな6年間を送れて良かった、と思うことができます。今後も、「この職業を選んで良かった」と、最後に思えるような、医師としての道を歩んでゆきたいと思っています。



大学に赴任したころに読んだ本

寄生虫学講座 教授 久津見 晴彦

最終講義を終え、雑誌、図書を充実したいという東京の「目黒寄生虫館」に寄生虫学の本を寄付するために荷造りしていると、20年以前が蘇ってくる。休憩して多田富雄教授の『免疫の意味論』を開き、第11章「免疫からの逃亡」のなかの「マラリアのトリック」と「寄生虫と人間」の部分を読んでみる。1973年の夏に日米医学協力会議の中の寄生虫病部会がカリフォルニアのアシロマ会議センターで開催され、日本からの幹部5名、会員3名中の一人として参加した。他の会員は当時千葉大学の病理学にいた多田富雄講師である。寄生虫学教室の横川宗雄教授が、有力な研究者として参加をお願いした。演題は「日本住血吸虫感染猿での免疫複合体腎炎の誘導」であった、もう一人は鹿児島大学の尾辻義人講師でフィラリア症の後遺症として有名な陰囊水腫と違う長さ58cm、最大周囲77cmの巨大な陰茎陰囊象皮病の症例を紹介して、米国研究陣を驚かせた。

その前年、1972年秋に旭川医科大学に内定のとき出版された内村祐之『わが歩みし精神医学の道』は私の愛読書である。北大医学部長の今裕教授に招聘され、恩師の呉秀三教授や父君の内村鑑三に勧められて北大精神科の教授になったのは1928年、30才のときである。東大から石橋俊実、北大から相川正義の両氏と教室開設の準備に努めたことが述べられ、ある頁では「生まれて初めての北国の生活はひどく楽しかった。朝日に輝く清浄な雪景色、ライラック薫る初夏のころのすがすがしさ、こうした自然もさることながら、純朴な北国の人の心に触れることは東京のような大都会では、とても味わえぬ経験であった。……とくに教授会全体が、実に気持ちの良い支持を与えてくれたのである」と語っている。さらに「アイヌの比較精神医学」、東大へ転任と苦悩、戦時体験、そして勿論クレペリン、ヤスパースなどの学風、帝銀事件、学会の盛衰、定年退職以後などに及ぶ。私の恩師小宮義孝先生の一高・東大の2年先輩で同じ医学者の自伝は、流麗な文章で北海道を称えており、赴任当時の私の感慨と同じである。

附属病院の背後に真紅の太陽が沈んだあと、燃えるような夕焼け雲が全面の空に広がっている風景は東京では見られないもので、いつも見飽きない。

赴任当時の私は20年間の研究所生活を終えた直後で、大学の講師、助教授の経験がなく、また北海道の寄生虫症についても詳しくなかったので、教材の準備、研究の出発に当たって模索していた。ご時勢なので宇井純氏の「大学解体論」3篇などの過激な本も瞥見し、「医療社会化の道標」なども読んだ。実際に強い興味をもって読んだ多くの本のなかには『生命現象を探る・生化学の創始者たち』と、同様の中央公論社の自然選書の中の『天才の精神病理、科学的創造の秘密』があり、熟読した記憶がある。前者はセント=ジェルジからワールブルグの6名、後者ではニュートンからノバート・ウィーナーまでの著名な6名が描かれている。セント=ジェルジは軍務と研究願望の葛藤のため左手の骨を銃で打ち、研究所に戻ったが生体実験に反対してマラリア流行地に送られたとか、ケイリンは寄生虫学教室の助手としてケンブリッジの初代寄生虫学教授ナッタルに採用され、戦時研究として蠅幼虫寄生の原生動物や虱の研究をしたなど、寄生虫の話が出てくる。

しかし「科学的業績を生み出してゆく個人的人間のドラマ」の主人公の精神病理学に対する私の興味は強い。特にルートヴィヒ・ヴィトゲンシュタインの生涯に圧倒される。いかなる帰属意識も拒否した「境界人」の父カールがすべての子供に徒弟の技術習得を強制したので、実科学校に進んだ少年時代を過ごしている。青年期に完成した「論理哲学論考」が父の経済評論の文体に似ているとか、遺産を拒否してリルケなどに与えたパトロン気分も父に似るなどは、理解しやすい。しかし哲学を放棄して田舎の小学校教師や修道院の園丁になる痛ましい病跡、彼の論理学における重要な発見と「日記」、戦地で勇敢に戦いながら「被造者体験」を経験して回心し危険な絶頂感があったことの内容や、引用されている文章の意味は、難しくて私には理解できない。

これらの本を読むのは、学生に語れるような優れた病跡がないから、あらまほしき疑似体験の材料としているものと思われる。いくら自分が平凡でも、目標や反省の相手が平凡な人では全く効果がない。「天才の業績は病跡に通じる」と、これらの科学者に畏敬と愛着を持つために読むのである。



退官にあたって

内科学第三講座 教授 並木正義

●まずお礼を

昭和51年に教室を開設してから18年の歳月が流れ去り、いつしか定年を迎えた。無我夢中で走り続け、気がついてみると18年経っていたという感じである。

その間、多くの人との出会いと交流があり、さまざまな事に遭遇した。ともかく旭川医大で過ごした18年間は、私にとって思い出深い有意義な人生のひとつまでであった。よい人たちにとりまかれ、助けられ、励まされて今日に至った。感謝の気持でいっぱいである。退官にあたって、まず最初に何かとお世話になった多くの方々に心から厚くお礼申しあげたい。

●教室づくりを振り返って

大学の臨床講座は、教育・診療・研究の三つを全うする使命がある。この三本柱の比重は同等であり、いずれも重要だ。新しく教室をつくるということは、苦労は多いが自分の考えで思い切ったことができるので、好都合であり張り合いがあった。私は開講当初から新設大学だという甘えた気持は抱くな、十分な設備がなくとも、工夫すれば研究の仕方はいくらでもあると言って、積極的な行動をとってきた。教室員もそれに応えてよく頑張ってくれた。数年たって関連する学会における教室の数々の発表は、「北風旋風」と言われ注目されるようになり、もはや新設医大の教室とはだれも思わなくなった。国際学会や国内学会で若い教室員がばりばりシンポジウムなどで活躍しているのを見て、他大学の人たちは驚異の目を見張り、「北風が吹きまくっている」と言った。教室員には新設の大学だからといって負けてたまるかといった気構えがみなぎっていた。それにどんな条件下にあらうとも、その立場において最善を尽くせば、おのずから道は開けるという体験を通しての自覚（悟）は貴重なものであった。この体験はよい意味での自信となり誇りにつながった。かくして10年経って、教室はたえず勉強し、発表し、よく論文を書くといった雰囲気自然のうちに培われ、やがてしっかりと根付いた。教室の伝統とはこのようにして築かれていくものであろう。

当初10人足らずの教室員も、今では250人を超える大世帯となった。当大学の卒業生だけでなく、各

地から人材が集まった。私は教室員にうるさいことは何も言わない。ただそれぞれの個性を生かし、能力を引き出し、勉強しやすい環境をつくり、いろいろなチャンスを与え、なんの心配もなく研究できるようにしてきただけである。これは教室員の苦労に比べると楽なものだ。私はいつも好きなことをやれと言ってきたので、教室の研究分野は極めて広く、個性豊かな人材が育った。これからも各分野で大いに活躍してほしい願っている。

教育の面では、人間性豊かな医者を育てるにはどうしたらよいかを常に考えてきた。教室員もよく学生のめんどうをみ、私の教育方針に協力してくれた。第三内科のポリクリは厳しいとの評判が伝わっているようだが、立派な医者を育てるには教育において厳しさがあって当然である。生半可な気持では人命をあずかる医者にはなれない。信頼される医者を目指すからには、やはり厳しい修練が必要だ。

診療面においては、心身医学に基づく全人的医療の実践を目標にしてきた。研究においても診療においても、なんらかの形で患者のためになり、患者の幸福につながるものでなければならぬという行き方を基本理念としてきた。患者1人ひとりが生きた教科書と思い、あらゆる感覚をフルに活用し、注意深く、きめ細かく観察することを習慣づけてきた。それによってこれまでいくつもの新知見を得た。医者にはこの注意力と観察力が極めて大事であり、医学生のとときからそれを養う努力をしてほしい。

●理想の医師像

長年医学教育に携ってきて、しみじみ感じている私の理想の医師像とは、①思いやりの心と謙虚さ、②目に見えないものを感じとる感性、③もののあわれを感じる情操、の三つをあわせ持った医師だということである。②、③はかなり年期を要するが、①だけは若いうちから身につけたいものだ。それには医学生の時からの心構えが大切である。

●誇りをもって

旭川医大の学生諸君、どうか自分の母校に誇りをもってほしい。また誇るに足る大学を築きあげるよう努めていただきたい。みなさんのご健闘を祈っている。さようなら。



学生二千態

歴史教授 原田 一典

本年3月末日をもって、本学を退くことになりました。目下焦眉の仕事をかかえ、退官を迎えての感慨に浸るとまもなく過ごしていますが、広報誌編集小委員会より本稿を依頼されて、つかの間の回想を呼び起こすきっかけを与えてくれました。

本学における20年と6か月は、それこそ火事場のような倉卒の開学を始めとして、すべて忘れ難い想いに包まれており、また、先輩、同輩、事務や病院の方々、それに学生諸君と、多くの良き人々にめぐり合い、お世話になり、楽しく、それなりに充実し、満足しうる日々であったと、感謝しています。

中でも、ふつふつと楽しさを想起させてくれるのは、学生諸君です。毎年、入学直後に配布される、入学生個々の写真を張り合わせたコピーを、何時も手許に置いてあります。現在、21期生まで2,303人の多彩な顔が並んでいます。極く少数、入学直後に退学した学生もおりますが、今までこれだけの学生諸君と接したわけです。そして、小さな大学ですから、顔を合わすチャンスも非常に多い。また、この小生の写真帳にはちょっと細工を施してあります。コピーを入手するとすぐ、名前の下に出身地や出身校などを書き込んでいます。その後時には、「病氣入院」とか、「アフリカ行」とか、「東医体〇〇1位」などと、他人から見れば他愛のないことをメモることもあります。声をかけたりかけられたり、便りをいただいたり、あるいはあの松葉杖をついているのは誰だったっけ、などと、名前と顔とが一致しない場合はその都度直ちに、この写真帳で確認してきました。ですからこれは、小生と学生諸君との間を結ぶ大切な媒体でした。年と共に老化の現象あらわとなり、利用頻度は高まるばかりです。在学生のみならず卒業生に関しても、風の便りでも耳にすると、同じようにこれを引き合いに確かめていますので、はなはだ調法していますが、早い期の方は相応にボロボロとなったので裏打ちしました。

研究室や家庭に訪れてくれた人たち、食堂や廊下でおしゃべりをした人たち、コンパで壮快に談じ合った人たち—ここで殴り合いの喧嘩などをしたという今もって慙愧に堪えないこともありましたけれど、多くは、多くは愉快的なことどもでした。声を掛

けられることに煩わしさを感ずる人もいて、迷惑をかけたかと気が咎めることもありましたが、本性オッチョコチョイで楽天的なものですから、しゃべりたがりやの性癖はとうとう直りませんでした。それでも、夏・冬・春の休業ともなれば、「^{おに}餓鬼の居ない間に」とほくそ笑んで仕事に励むのですが、しかし半ばを過ぎるとなんとなくもの侘びしさを感ずるものでした。

当面する課題にひるむ人、瑣末な問題にこだわり過ぎる人、言いたいことも言えない人、自らの世界にこもりあえぐ人、そのような人たちに、そんなこと忘れろ！とか、開き直れ！！とか、酒でも喰らって寝ろ！！とか、大東で無責任なことを言い放ちつつも、よくまあ小生に似た面を持つ人よ、と感心したり考え込んだりしてしまうこともあり、また逆に、世の多くに無頓着な人、われ人に関せず人われに関するを拒む人、ひたすら悠悠の一語につきる人、などにまさに関動的な人たちもいて、折りにふれ啓発されるものでした。

歴史学は、すべて人の書き遺したものを素材とします。それを扱う初発の要諦は、可能な限り書いた人と同じ次元に立ちもどって読み、感じ、解釈して、その人の心情や感性やその状況を汲みとり推し測って、理解すること、と考えています。さすれば多く、感情移入されてしらずしらずに、その人を“恋うる”人になってしまいます。そんなことが習性となって、現実においても、人をいろいろな側面から眺めようとする作用が働くのかもしれない。といったら、そんなことは学問と無関係で、お前の単純な人間好みの感傷に過ぎん、と批判した仲間がいましたが、そうかもしれません。

いずれにせよ、多くの学生諸君と出会いました。もちろん一言も個人的に言葉をかかわす機会のなかった人たちもおります。しかしそのような関係としても心にのこります。これから後も、やはり手許に置いておくこの写真帳を眺めて、空想の付き合いができることをひそかに期待しています。二千態のそれぞれ個性を保有する学生、ならびに学生であった皆さん、この20年の楽しみを与えてくれまして、本当にありがとうございました。さようなら。



日常性からの脱皮

生理学第二講座 教授 坂本尚志

昨年3月末に国立岡崎生理学研究所に転出された初代森 茂美教授の後任として、本年1月16日付けをもって千葉大学より赴任致しました。

私は本学2期生として1974年に入学して以来、この20年の間、アメリカ留学に2年9カ月、千葉大学・医学部に助教として3年9カ月離れた他は、旭川において学生、大学院生、生理学第二講座助手、講師として在任していました。

20年前と今、本学およびそれを取り巻く周辺は大きな変貌を遂げています。しかし、その中で20年を過ごしてきた私には、ある日突然大きな変化が起こったのではなく、毎日の日常的な小さな変化を繰り返して、今日の姿が出来上がってきた様に思います。現在、私は神経生理学の分野で、発声の発現機構の解析を進めていますが、決してはじめからそれをテーマとしていたのではない様に。

私は研究にあたって、主に動物モデルを用いた実験を行ってきました。一般の人には動物実験というと、メスを振り上げた死刑執行人のような格好の研究者と、交通事故にあって内臓が飛び出しているような動物がイメージされるようです。多少の誤解はあるにしても、確かに動物実験というのは、一般の人にとって非日常的な行為であります。しかし、私も含め、かなり多くの医学研究者にとっては日常的な行為であります。

しかし、この日常的という言葉はなかなかの曲者であります。人それぞれ自分の過去の経験に基づいて日頃の事象を日常的と判断しています。従って多くの経験を積むことは、判断の基準を広げますが、同時にまた確固たる日常性を築き上げることにもなります。

研究者というのは常に新しいものを発見して行かなくてはならない宿命を背負っています。蟹の横ばいではなく、前に進むサイエンスを、と私はこれまでの恩師達から教わってきました。確かに、毎日の研究成果を新たな着眼点から見ると、また違った展開が開けることがあります。しかし、それは、いままで培ってきたものを否定することも厭わない覚悟がなくては、なかなか出来ないことです。昨日の常識が今日の非常識。気持ちでは理解できても、終戦のような大きな価値観の変化を越えてこなかった、

戦後すら知らない子供であった私にはなかなか難しかったように思います。

正直に言って、“個”の確立の未熟な私は、自らを異なる環境に置いて、“全体”に流されて行くことが、最も容易に異なる価値観を持つようになる近道と思っています。私は、大学院時代、短期間ではありましたが他大学の研究室において勉強する機会を得ました。学位論文となった神経細胞内記録法の勉強のために筑波大学、電気泳動法のために富山医科薬科大学、慢性細胞外記録法のために東京医科歯科大学、そして最後に東京大学脳研究施設へと。また卒後はロックフェラー大学において大脳皮質の研究の機会にも恵まれました。いずれも時がくれば、旭川に戻る場合であったので、離れてみないと分からないことがあるとは言われても、その時々にはなかなか実感は出来なかった様にも思います。しかし、時を経るにつれ、単に新たな研究手法や人との出会いのみならず、発想の転換、日常性からの脱皮をするための大きな経験をすることが出来たと感謝しています。

4年前、旭川を離れ、千葉大学において新たな気持ちで教育・研究生活を始めた際、これもまた日常性からの脱皮と思い、常に新たな気持ちを心がけました。しかし、ともすれば日常性に埋没してしまっていたのも事実でした。石の上にも三年とか、住めば都とか、日常性に埋没する方が実際の暮らしでは楽のように言われます。また、齢を重ねるに連れ日々の過ぎ行くのも加速し、あっと言う間に新しい環境に適應してしまいました。この度、1月から赴任して、マイナス25℃という、本州の人間ならば、とても住めそうにないと思う旭川の冬の暮らしを知らなかった訳ではありませんし、4年前まで居た所だと、たかをくっていましたが、これが大間違い。多少暑くても死ぬことはないが、寒さは命に関わると痛感している毎日です。

母校という私にとってある意味で“日常”であった場所に戻ってきて、新たな気持ちで研究、教育に精進しよう身構えてみても、日常性からの脱皮を日常的に考えなくてはならない毎日です。どうか、日常性に埋没しそうな私に皆様のご指導、ご助言をお願い致し、着任の辞とさせていただきます。

講師に昇任して

■ 耳鼻咽喉科 ■

野中 聡



平成5年11月に海野徳二教授のご高配により講師に就任いたしました。私は本学の3期生として学生生活を送り昭和56年に卒業しました。その後耳鼻咽喉科学教室に入局しましたが、医

局員のご理解により大学院に進学する機会を得ることができました。基本的な臨床研修の後、第2年間に渡って生理学第二講座において上気道の呼吸生理についての研究を致しました。実験ばかりでなく様々な経験を多くの先輩とともに得ることができたことは現在の私の研究における基礎となっております。大学院卒業後、市立稚内病院に勤務いたしました。大学病院とは全くこととなった環境において責任をもって診療を行なう立場を経験し、臨床医の難しさを痛感いたしました。様々な患者を毎日診療するなかで、現在盛んに叫ばれている informed consent の重要性を自分なりに認識することができたものと考えております。

昭和63年6月にはいくつかの幸運が重なり、米国

Rockefeller 大学の Miller 博士のもとで嘔吐反射（上気道も関与する）についての基礎的研究に参加することができました。大学院生の時に扱った呼吸ニューロン活動の記録ばかりでなく、様々な電気生理学的手法、薬理学的手法を駆使して、一つのテーマの解明を試みる様子を目のあたりにすることができました。また、自分自身の研究面における進歩はもちろんでありますが、異なる文化、環境の中で生活したことや国内外に多くの友人を得たことなど、留学を通して貴重な財産を得ることができたと考えております。得られた経験を教室員の仲間と少しでも分かち合うことで生かしていければと考えております。

この度、講師に任じられ、診療、研究のみならず教育の一端も担う立場となりましたが、その大役を考えますとはなほだ心細く思うばかりです。講義の準備をすれば、いかに自分の知識が乏しく、また断片的であるかを再認識し、嘆いているありさまです。いささか開き直り気味ではありますが、講師を拝命したことを勉強する機会を得たこととして受け取り、誠心誠意努力する所存であります。今後とも、何とぞよろしくご指導ご鞭撻をお願い申し上げます。

講師に昇進して

■ 第一内科 ■

箭原 修



自己紹介と神経内科のことを述べさせていただきます。

生まれは旭川で、実家が大正橋や神楽岡公園から歩いて10分ぐらいの所でした。私にとって幼い記憶の中の神楽岡は、町内

の仲間と木造りの大正橋を渡り、崖を登って山椒魚もどきを捕りに出かけたり、上川神社の境内の裏で栗を拾った場所でした。そのころの岡は人が住んでいる気配は全くなく、現在の様変わりを想像できません。天気の良い日には、実家の屋根に座って旭岳を眺めると、山腹の避難小屋をも望むことができたと憶えております。

昭和48年に北大医学部を卒業し、神経内科をしたく思い母校の第一内科に入りました。2年間の呼吸器、循環器と一般内科の研修後、恩師である村尾誠教授の勧めもあって、東大神経内科で神経内科学、東京都養育院付属病院（現在東京都老人センター）で脳血管障害を若い時期に勉強させて頂きました。このころに御指導頂いた多くの先生方の価値観が私

の医師としての生き方の礎になっているように思います。

昭和55年に小野寺教授の旭川医大第一内科に移りました。循環器や呼吸器のなかで主として神経内科の疾患を診て、十数年が経りました。神経内科を志す仲間も4期生から入局し、現在10人の仲間になり、5人は神経内科専門医になっています。神経内科としての関連病院は小野寺教授のときに国立療養所道北病院、菊地教授になってから国立療養所名寄病院を作させて頂きました。また勉強会も現在旭川神経談話会、旭川神経抄読会、神経を診る会、脳循環内科セミナーと少しずつ神経関連が増え、道北病院や名寄病院の神経内科の先生方と症例検討会もできるようになりました。この間、英国のロンドンにある王立神経研究所 (Institute of Neurology, Queen square) と Guys medical school で N-CAM の in situ hybridization を勉強する機会も与えられました。

平成4年9月より、小野寺教授から菊地教授が教室を主宰するようになり、教室のテーマである総合的な循環器（心、肺、腎、脳）に教室作りが始まりが始められました。平成5年12月に講師になり、教室の若い先生方と一緒に、新しい目標に向かって頑ばりたいと思います。今後ともよろしく申し上げます。

講師に昇任して

■ 眼科 ■

秋葉 純



このたび、吉田晃敏教授の御高配により12月15日付けで講師に就任いたしました。

私は昭和57年に四期生として本学を卒業後、本学の眼科学教室に入局しました。眼科医として

3年間の初期研修を終えた後、網膜硝子体疾患に興味をいだき、専門的な臨床経験をつむために京都大学医学部眼科学教室に1年間国内留学いたしました。昭和62年には海外留学の機会を与えられ、米国ボストン市にあるHarvard大学、網膜財団眼研究所のTrempe教授のもとで2年間網膜硝子体疾患の臨床研究を行いました。そこでは約3000例の患者さんの硝子体を特殊なレンズをもちいて観察し、同時に写真に記録することにより、さまざまな網膜硝子体疾患の病態生理における硝子体、特に後部硝子体剝離の役割を検討いたしました。なにぶん初対面の患者さんをご検査室へ連れて行き、英語で検査の説明をおこない、検査終了後には診察室へ戻すという一連の作業を一人で行わなければならない、留学当初は冷や汗をかくこともありました。その後、硝子体を毎日観察しているうちに、どのようなメカニズムにより硝子体に病的変化がおこるのかという疑問がふつふつと沸いてきました。幸い世界一の規模をほこる眼科研究所ですから、臨床ばかりではなく基礎研究部門も充実しておりましたので、臨床研究の合間に生化学研究室のChakrabarti教授の指導をうけ、硝子体の生化学的な研究を行うことができました。この留学以来、「硝子体の液化、収縮、後部硝子体剝離の臨床と生化学的なメカニズムの解明」が私の研究テーマとなりました。さらに平成4年には、吉田教授の御高配により文部省在外研究員として再度同研究所で研究をする機会を与えられ、フリーラジカルによる硝子体液化のメカニズムについての研究をおこない、現在も本学にて続けております。

眼科学教室も医局員が増え、私が入局した頃とは隔世の感があります。今度は私自身が後輩を指導する立場となり、身が引き締まる思いです。今後も当教室のテーマである網膜硝子体疾患の病態解明と治療をより発展すべく努力する所存ですので、御指導、御鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。

スキー教室

今年度も12月20日(月)・21日(火)の両日、恒例のスキー教室が、外国人留学生4名を含む19名の学生の参加を得て、北大雪スキー場で実施されました。

初日は、午後から初級・中級・上級の3班に分かれ講習、夜には講師及び外国人留学生を囲んで懇親会が開かれました。

2日目は午後3時にスキー場を発つまで講習が行われ、全員名残惜しくもスキー場を後にしました。
(学生課)



クリスマスコンサート

室内合奏団と合唱部によるクリスマスコンサートが12月20日(月)・22日(水)それぞれ病院ロビーで行われました。

このコンサートは日頃の練習成果を発表するとともに「入院生活を送っている患者さんの励みになれば」とこの時期毎年企画されているもので、ロビーには入院患者、看護婦、医師など約100名が詰めかけ、コンサートを楽しみました。

(学生課)



平成5年度

1年のあゆみ

4月

- 9日 平成5年度入学式 (於 体育館)
[新入生100名 (うち女子学生35名)]
- 19日 新入生研修
- 20日 (於 第2～4セミナー室、和室)



新入生研修

- 23日 医師国家試験合格者発表
(本学合格者 116名、合格率 91.33%)

6月

- 4日 第19回医大祭
- 6日 テーマ:『光陰矢の如し』
- 30日 学位記授与式 (於 第2会議室)
(学位記被授与者 3名)



第19回医大祭

7月

- 9日 第40回北海道地区大学体育大会
- 12日 (当番校 北海道教育大学)
[本学参加種目] 陸上競技(男女)、準硬式野球、バスケットボール(男女)、バレーボール(男女)、サッカー、卓球(男女)、剣道(男)、弓道(男女)、ソフトテニス(男女)、

- ハンドボール
成績: 準硬式野球 優勝
男子総合6位、女子総合13位
- 7月 第36回東日本医科学生総合体育大会夏季大会
- 8月 (主管校 順天堂大学)
[本学参加種目] 陸上競技(男女)、準硬式野球、テニス(男女)、ソフトテニス(男女)、卓球(男女)、バレーボール(男女)、バドミントン(男女)、サッカー、バスケットボール(男女)、柔道、剣道、弓道、空手、水泳(男女)、ゴルフ(男女)、馬術
成績: ソフトテニス(女) 準優勝
卓球(女) 準優勝
バドミントン(男) 準優勝
弓道 準優勝
ゴルフ 3位
総合4位
- 27日 平成5年度納骨式 (於 本学納骨堂)

8月

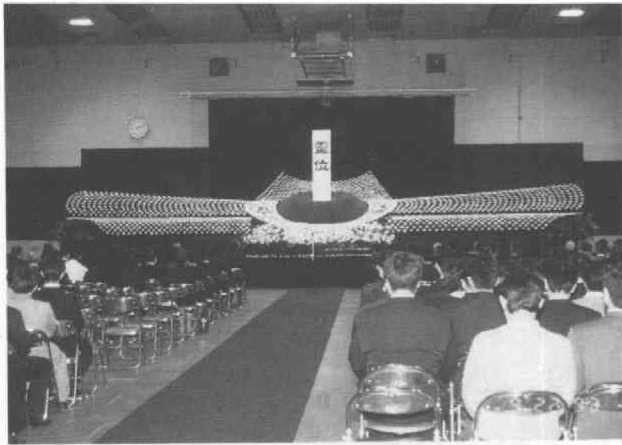
- 8月 第36回東日本医科学生総合体育大会冬季大会
- 3月 (主管校 日本医科大学)
[本学参加種目] ラグビー、スキー、アイスホッケー

9月

- 8日 体育大会 (主催 学生)
[競技種目] サッカー、バレーボール、ソフトボール、綱引き、リレー、駅伝
- 22日 平成5年度解剖体慰霊式並びに文部大臣感謝状伝達式 (於 体育館・第4セミナー室)
- 30日 学位記授与式 (於 第2会議室)
(学位記被授与者 9名)



体育大会



解剖体慰霊式

10 月

- 1日 平成5年度公開講座
- 26日 「知っておきたい消化器病のいろいろ」



公開講座

11 月

- 5日 本学記念日
開学20周年記念式典、祝賀会、記念フォーラム

12 月

- 20日 スキー教室 (於 北大雪スキー場)
- 21日 講師4名 厚生補導委員会委員、



クリスマスコンサート

参加学生19名

- 24日 学位記授与式 (於 第2会議室)
(学位記被授与者 12名)



スキー教室

1 月

- 15日 平成6年度大学入学者選抜大学入試センター
- 16日 試験 (本学会場 840名)

2 月

- 15日 久津見教授最終講義
- 17日 並木教授最終講義
- 18日 原田教授最終講義
- 18日 平成6年度大学院入学者選抜試験
- 25日 平成6年度第2次試験 (前期日程)

3 月

- 3日 平成6年度大学院入学者選抜試験合格者発表
- 7日 平成6年度第2次試験 (前期日程) 合格者発表
- 9日 久津見教授、並木教授、原田教授、歓送式
- 12日 平成6年度第2次試験 (後期日程)
- 23日 平成6年度第2次試験 (後期日程) 合格者発表
- 25日 平成5年度学士学位記授与式 (於 体育館)
(学士学位記被授与者 119名)
博士学位記授与式 (於 第2会議室)
(博士学位記被授与者 33名)



久津見教授、並木教授、原田教授、歓送式

おしらせ

新歓合宿のお知らせ

毎年大好評の「新入生歓迎合宿」を、今年も4月9・10日に行うことになりました。

予定されている内容は次のとおりです。まず学内においては、医療の先端を実践されている教授の、ためになる講演、各クラブの紹介、学内めぐりなどがあります。その後、高砂温泉に移動し、そこではグループごとの先輩方との交流会、新入生全員の自己紹介(去年は、一発芸をした人、歌を歌った人など、いろいろいました。)、恐るべきクラブ勧誘などが行われ、その後は1年生だけの時間となります。新しい友と飲み明かすのも良いですし、温泉ですから、もちろんお風呂に入るのも良いでしょう。眼くった方のための布団も用意してあります。また、少しアルコール濃度が高くなりすぎても、先輩方がすぐに助けてくれるので安心です。

去年は約90名の1年生が参加し、約200名の先輩方が合宿を盛り上げてくださいました。この合宿の有意義さは体験してみなければ分かりません。きっと、大学生活6年を通じての心の友との出会いが待っていることでしょう。多くの友達を作って、大学での新しい生活を素晴らしいものにしてください。

～上級生共々、心より新入生の参加をお待ちしております。新入生歓迎実行委員会より～

20才以上の学生の国民年金への加入について

国民年金法の改正に伴い、大学に在学する学生で20才以上の者は、平成3年4月1日から国民年金の被保険者(当然加入)として適用を受けることになりました。

従来学生については、20才以後在学中に障害者となった場合、国民年金に加入していない限り障害基礎年金が支給されず無年金となっていました。また、基礎年金制度は、原則として、20才から60才までの40年間加入することを前提に満額の老齢基礎年金を支給することとされていますが、学生は、任意加入とされていたため20才以上の在学期間中に、国民年金に加入していなかったものについては、卒業後年金制度に加入しても満額の老齢基礎年金が受けられませんでした。

このため、国民年金法が改正され、平成3年4月1日から、20才以上の学生も全て国民年金に当然加入することになりました。

なお、国民年金への加入の手続き、保険料の納付方法及び保険料の免除等の詳細については、住民票を登録している市区町村の国民年金担当窓口へ直接お問い合わせください。

平成6年度 前期分授業料免除及び延納・分納について

平成6年度前期分授業料免除及び延納・分納を希望する者で、下記基準のいずれかに該当すると思われる者は、教務部学生課厚生係で必要書類を受け取り下記の期間内に申請すること。

なお、申請者については、選考の間授業料の納入を猶予します。

また、不明な点は、同係に問い合わせ願います。
記

1. 授業料免除基準

- (1) 経済的理由によって授業料の納付が困難であり、かつ、学業優秀であると認められる場合
なお、平成6年度において原級に留置されている者又は、最短修業年限を越えて在学している者は、免除の対象としない(休学の理由による者を除く。)
- (2) 授業料納期前6月以内(新入生については、入学前1年以内)において学生の学資を主として負担している者(以下「学資負担者」という。)が死亡し、又は本人若しくは学資負担者が風水害等の災害を受けたことにより、授業料の納付が著しく困難であると認められる場合
- (3) (2)に準ずる場合であって、学長が相当と認める事由がある場合

2. 申請書類

- (1) 授業料免除申請書
- (2) 学資負担者が死亡した場合は死亡診断書
- (3) 災害を受けた場合は罹災証明書(市区町村、警察、消防署が発行したもの。)
- (4) 市区町村発行の所得証明書(給与所得者については、平成5年分の源泉徴収票を、給与所得者以外については、平成5年分の確定申告書(一面・二面)等の写し(生計を一にする家族全員分)を、また、学資負担者が死亡した場合は、死亡前の所得証明書を併せて添付すること。)
- (5) 失業者は、民生委員又は職業安定所の証明書
- (6) 生命保険金の支払いを受けた場合は、当該保険会社の保険金支払証明書
- (7) 家族の中に就学者がいる場合は、その者(申請者本人及び義務教育の就学者は除く。)の在学証明書
- (8) 自動車保有に関する申立書
- (9) その他家庭事情により参考となる証明書等

3. 申請期間

- (1) 在学生……………平成6年2月14日(月)
～3月31日(木)
- (2) 平成6年度入学生…平成6年4月1日(金)
～4月22日(金)

平成6年度 日本育英会奨学生の募集について

日本育英会は、優秀な学生で経済的理由のため就学困難な者に学資を貸与しております。

本学では、日本育英会からの推薦依頼に基づき、出願者の種々の条件を考慮して選考を行い、日本育英会へ推薦します。

ただし、日本育英会では奨学金貸与の種別ごとに推薦基準が定められており、その資格があっても採用枠の関係で推薦できない場合があります。

奨学生の募集要項を、4月上旬に公用掲示板に掲示しますので、貸与を希望する者は、提出期限に遅れないよう所定の書類を教務部学生課厚生係に提出してください。

なお、募集の時期以外に家計の急変により、学資の支弁に困難な事情が生じた場合は、同係に相談してください。

学生教育研究災害傷害保険の加入について

本学は、学生の正課中・課外活動中における災害事故補償のために『学生教育研究災害傷害保険』の賛助会員大学となり下記のとおり加入受付事務等を行っています。

本保険は、学生の互助共済を基本として運営されており、学生生活中の万一の場合に備え、できるだけ全員の加入を勧めています。

まだ加入していない学生は、加入するようにしてください。

記

1. 受付期間 自 平成6年4月1日(金)
至 平成6年4月28日(木)
2. 受付窓口 教務部学生課厚生係
3. 保険料 6年間 3,400円
5年間 2,950円
4年間 2,450円
3年間 1,900円
2年間 1,300円
1年間 750円
4. 支払い保険金の種類と金額

区分 種類	正課中 学校行事中	学校施設内の休憩中 学校施設内外の課外活動中 (学校施設外の課外活動については、 大学に届出た活動に限る。)
死亡保険金	1,200万円	600万円
後遺障害保険金	54万円～1,800万円	27万円～900万円
医療保険金	実治療日数4日以上が対象 6千円～30万円	実治療日数14日以上が対象 3万円～30万円
入院加算金	1日につき4,000円	1日につき4,000円

Some Developments in English Studying in Asahikawa Medical College

Simon N. Bayley

During this last year I have had many requests for help with studying English, and I think that many people may be interested in the developments that have been made to help the members of this college.

The college is now a registered site for the University of Cambridge examinations in English as a foreign language. There are a number of these exams at different levels. They test reading, writing, listening and speaking and they are the most popular such English language exams in the world. The most popular with both students and doctors here is the Cambridge Preliminary English Test (PET). PET is regarded by the Council of Europe as the minimum level of English for living in an international situation. Other, higher level, Cambridge tests are used by universities all over the world. I would like to recommend anybody who is interested in working or traveling abroad to take these examinations.

In order to help students with their English studies I have started to set up, in the small room next to the LL, a Self-Access area. Anybody can come to this room, copy one of the special tapes and take two or three of the worksheets. The tapes and the worksheets will help students to improve their listening in English, as well as vocabulary, pronunciation etc. There will be tapes for students at different levels as well as special subjects, such as listening to conferences, traveling in America, exam skills etc. I can make tapes for any special subject that I am asked for, any subject that will help the members of the college use and understand English. I hope that members of the college will use this facility.

One of the most common requests I have is for help in speaking at conferences in English, either in Japan or abroad. A little work can improve the quality of a presentation enormously. For this reason, I am planning to run a short course on giving presentations. I intend to run this course one or two times a year, depending on how popular it is.

If you would like any more information about any of these subjects, please call me, Simon Bayley, on extension 2737, or visit me in my office.

学生団体の設立・継続届について

平成6年度において、新しく設立しようとする学生団体、もしくは活動を継続しようとする団体は、4月28日(木)までに設立届または継続届を学生係に提出してください。

なお、継続届の提出がない学生団体は、解散したものととして処理しますので注意してください。(学生課)

教官の異動

※転入	6. 1.16	生理学第二講座	教授	坂本尚志
※昇任	5.11.16	耳鼻咽喉科	講師	野中聡
〃	5.12. 1	第一内科	講師	箭原修
〃	5.12.16	眼	科講師	秋葉純

課外活動報告

V2を成し遂げて 副主将 稲岡 努

12月25日早朝、私達アイスホッケー部19名を乗せたジャンボジェット機は大勢の熱烈なサポーターに見送られ大空へと飛び立った。機内では昨夜の疲れからか皆ぐっすり眠っていた。私は退屈であったのでスチュワーデスさんとお話でもしようと思ったのだが隣席に旭医の御大がどっかりと腰を下ろしていらっしやだったので身動きがとれず眠ってしまった。

大会会場の軽井沢スケートセンターにはその日の夕方に着き、早速練習を開始した。練習後は風呂につき、豪華なディナーを楽しみ、しっかりとミーティングをした後は皆がお待兼ねのスーフファミ・熱き男達のボンバーマン対決が始まった。中でもギンギンパワーが面白かった。これはチームの士気を高めるのとまとまりを出すためには必要不可欠なアイテムであった。

大会初日、私達は前年度優勝ということでシードされていて試合がなかった。いくらボンバーマンが楽しいといっても私達はホッケーをしにきたので、初戦の相手や有力チームを偵察にいった。皆予想以上にうまくいった。ボンバーマンなどしている場合ではなかった。その日からミーティングは非常に厳しく行われた。第二日、予選リーグが行われ北大に5-1で勝ち、決勝リーグへと駒を進めた。決勝リーグでは慶応と引き分けた他はなんとか勝ち最終戦の東医を残すだけとなった。この時点で第一位が全勝の東医、第二位が旭医であり、最終戦が優勝決定戦というなんとも素敵な大会となった。集まった観客も物凄い数でバックがゴールを掠める度に悲鳴やら、溜め息やらで場内の興奮は最高潮。そんな中でプレー出来、本当に私達は幸せ者であった。この試合DF、GKが鉄壁の守りをし、旭医の大将がしっかり3点取って完勝した。皆最高の出来であった。試合終了のブザーがなった瞬間、スティックやらグローブやら投げだし皆で抱き合って喜んだ。勝者だけに許される最高に贅沢な一瞬である。私達は念願の優勝カップを再び手にいれ、その夜、心行くまで勝利の美酒に酔ったのはいうまでもない。

私達がこうして再び優勝できたのも部を支えて下さった皆様のお陰であります。この場をかりまして厚く御礼申し上げる次第であります。

東医体(冬季) 12/26~12/30 軽井沢

優勝	旭川医	3	{	1-0	0	東京医
	科大学		{	0-0	0	科大学
				2-0		

個人賞	MVP, ポイント王	千里直之(5年)
	BEST 6	DF 小村景司(5年)
		DF 齊藤裕樹(5年)
		GK 高橋淳一(5年)



窓外

橋爪裕子

研究者の良心

毎晩遅くまで起きて日本人選手を応援した、リレハンメルオリンピックも終わりました。心に残る名場面の一つは、アメリカのスピードスケート選手ダン・ジャンセンが、最後のレース1000mで金メダルをとったことでしょうか。世界一の実力を持ちながら、何故かオリンピックでのメダルに縁がなかったダン・ジャンセン。このオリンピックでも500mではバランスを崩してしまいました。1000mでは、思わず私もダン・ジャンセンを応援していました。アメリカの応援も並々ならぬものでした。そのなかで目についたのは、“Dan is the Man!”でした。もちろん“the Man”とは、“世界一の男”という意味です。同じスケート選手ノルウェーのコス選手に対する応援でも、“Koss is the Boss!”というのがありました。これはDanとMan、ならびにKossとBossが韻を踏んでいるところが“味噌”だと思います。

ところがダン・ジャンセン選手が金メダルをとった翌日のある新聞に、この応援のことがでていて、「アメリカも『ジャンセン イズザマン』の横断幕を掲げて大応援をしていた。」という意味の記事が載っていました。おそらくこの記事を書いた記者は、ダンが姓ではなく名前なので、ジャンセンとしたほうがわかりやすいと考えて、わざと事実とは変えて記事にしたのだと推察します。しかしダンをジャンセンと置きかえてしまえば、韻がなくなり、少しもおもしろくなくなることに、この記者は気がつかなかったようです。それにもまして、たとえわかりやすくするためとはいえ、事実とは異なる報道をしたこととなります。わたしはこの記者の記者としての奢りを感じました。

ふり返って自分自身のことを考えますと、私には研究者の奢りがないと自信を持って言えるか、少し不安になりました。形態変化など自分で変化の程度を評価する場合、仮説にあうように評価していないでしょうか。棄却検定をすることなしに、すこしはずれたデータを除外していないでしょうか。私は研究者の良心は、自分のデータに正直であることと思います。そのうえで、データをどのように解釈するかが研究者の仕事なのです。(薬理学講座 講師)